



斜里郡清里町
「クリニックきよ里」での日常診療

網走医師会
クリニックきよ里 院長
鵜木 和久

私がクリニックきよ里で診療をはじめてから、率直に感じたことを書きたいと思います。清里町は知床半島の付け根にあたり、小清水町と斜里町の間位置している人口約4,500人の小さな町です。車でそれぞれ14分くらいのところに小清水赤十字病院、斜里町国民健康保険病院があります。総合病院としては45分ほどに網走厚生病院があり、ここが地域医療連携で紹介先となる総合病院です。しかし、この網走厚生病院も常勤の呼吸器内科医がいないなど医師不足にあるのが実情です。

当クリニックは医師1名、看護師2名体制で外来診療を行っており、一般入院とショートステイをあわせ19床ベッドをもっています。前任が高齢で一般入院患者は診ていませんでしたが、現在は入院患者も診ております。標榜は、はじめ内科だけでしたが、今は外科、小児科、皮膚科も診療科として掲げています。医師1名ということもあり、救急体制は1次救急を診察時間中のみ引き受けています。救急搬送は1ヵ月に1、2回程度です。それほど負担にはなりません、その間の外来診療はストップしてしまうため、今後何らかの対策が必要であると考えています。

まず、ここの地域医療を知る上で、患者数の推移から探っていきたいと思います。私が最初に診療を開始した平成24年1月は1日平均24人という患者数でしたが、平成24年10月の患者数は1日平均64人と約2.5倍の増加がみられました。11月現在はインフルエンザワクチン接種もあり1日100人近い患者さんが受診されています。これは今まで未就学児の診察をしていなかったことや、整形外科領域、外科領域の診察をあまりしていなかったこと、診察時に全員に対し聴診を行っていたことが主な原因として考えられます。

子供をもつ若い世代は、片道45分かけて網走市の小児科開業医や網走厚生病院に受診されているのが現状です。しかし、現在は小児科も診察しているという口コミが広がり、徐々にですが当クリニックを受診される方も増えてきました。子どもたちや若い世代が当クリニックを受診しなかった理由としては、前任が高齢であったことやパターンリズム的な性格が強かったことも一因として考えられます。患者さんの中には右大腿にラグビーボール大の皮下腫瘍を持っていたが話を切り出せずにいる方もおられました。私に相談後はすぐに紹介をし、手術後は無

事に生活なさっています。また先にも書きましたが、ひと昔前のように若い女性であっても上半身脱衣にて聴診をしていたことも患者さんが離れる原因であったと考えられます。聴診は苦痛であったと多くの女性患者さんから伺いました。

また、受診される患者さんは8割以上が70歳以上であるということ、農業従事者が多いということがこの地域の特徴であり、都市部よりも腰痛や膝関節痛の訴えが多い地域です。そのため関節注射やトリガーポイント注射といったような手技が必要になってきますが、こちらも私が赴任する前までは、近隣の2病院で処置を受けていた患者さんが多くいらっしゃいました。そういった方々も地元で治療できるならということで当クリニックに戻ってきつてあります。また、農作業中に鎌で指を切った、料理中に包丁で指を切った、転倒した際に上肢もしくは下肢を挫傷したなどで縫合処置が必要になってくる場面もあります。このようなときに簡単な外科処置や縫合ができなければ、へき地医療はできないでしょう。

1つの施設で内科外科問わずすべての疾患に対応することが町民から望まれていることであり、それができなければ、患者さんの移動にかかる時間やお金などに負担をかけることとなります。さらに、高齢にもかかわらず独居の方が多く生活しているため、ケアマネジャーと連絡を取り合い一人一人に合った治療をしていくことも重要になってきます。

最後に簡単に他の仕事内容についてですが、町には他にクリニックがないので学校医もしており、学校健診や未就学児、学童の予防接種も行っています。他に企業健診、ショートステイも行っています。また、単純もしくは造影CT検査を行い、大腸がん、肺がん、硬膜下血腫、脳出血を発見し紹介することができました。他には経鼻内視鏡検査による胃がんの発見や誤飲異物の除去も行いました。エックス線透視検査による消化管造影検査や脱臼の整復も行っています。脂肪腫摘出やアテローム摘出、疣贅の除去もしています。他にも町民の皆さんから相談があれば、なんでも断らずに診察しているのが現状です。

皆様に現状を知っていただき、微力ながら「北海道へき地保健診療計画」の参考になればと思います。今後は私たち医療法人でも医師確保に尽力していき、この地域の次の医療を担っていけるよう頑張りたいと考えています。